

# 国際芸術祭の行方；奥能登国際芸術祭取材して

## Whereabouts the International Art Festival should go: Report on Oku-Noto Triennale, Suzu 2017

造形表現学科非常勤講師 人見 伸子

1. プロローグ
2. 作品の紹介と検証
3. 問題点と今後の課題の考察
4. エピローグ

### 1. プロローグ

2017年は世界各国で、主要な国際芸術祭が相次いで開催された。イタリアのヴェネツィアで1895年から2年ごとに開催されている「ヴェネツィア・ビエンナーレ」第57回展が、5月13日～11月26日に開催。ドイツ中部の都市カッセルでは、1955年以来ほぼ5年ごとに開催されている「ドクメンタ」第14回展が6月10日～9月17日まで、そして日本の横浜市では2001年にスタートした「横浜トリエンナーレ（通称ヨコトリ）」第6回展が8月4日から11月5日まで開かれた<sup>1)</sup>。いずれも各国の中核都市で開催され、歴史も知名度もあり、多くの観客を集める現代美術展である。

一方で昨今の日本では、地方の人口が少ない地域、いわゆる過疎地を会場として国際芸術祭を開き、各国で活躍する作家を招待して一種の「町おこし」を図ろうとする動きが全国で見られる。2017年にも新たに長野県大町市の北アルプス国際芸術祭、宮城県石巻市では東日本大震災からの復興の象徴としてReborn Art Festivalがスタートした。とくにここ数年はその動きが過熱気味となり、林立する地方の芸術祭については賛否両論があることも事実である。

そうした地方再生をかかげる芸術祭の仕掛け人として、最近とみに注目されているのが北川フラムである<sup>2)</sup>。新潟県出身の北川はまず2000年に、故郷・高田市（現・上越市）に近い越後妻有地域（十日町市および津南町）で「大地の芸術祭：越後妻有アート・トリエンナーレ」を開催。「人間は自然に内包される」を理念に、約762平方キロメートルに及ぶ土地を美術館に見立て、アーティストと地域住民とが協働した作品を展示する試みを開始した<sup>3)</sup>。当初は批判的な意見も多かったが、地域の未来を見据えた活動はやがて定着し、2015年には第6回展を数えるまでになった。越後妻有が大地をテーマとするなら、北川が次に取り組んだのは海と島の豊かさに目を向けた「瀬戸内国際芸術祭」である。直島・豊島・小豆島など主に香川県の島々が会場となり、そこで育まれてきた固有の生活や歴史に注目。アートが関わることで過疎地域となった島の人々、とくにお年寄りたちを元気にすることが主たる目的となった<sup>4)</sup>。

こうして実績を重ねてきた北川フラムが総合ディレクターとなり、2017年9月3日から10月22日まで石川県珠洲市で「奥能登国際芸術祭」が初めて開催された。珠洲市は能登半島の先端に位置し、江戸時代は北前船の寄港地として、1970年代まではイカやイワシなどの沿岸漁業で賑わっていたが、現在の人口は約14,000人（2017年10月現在）。若者のほとんどは働き口を求めて金沢市や県外へ移り住み、過疎に悩む典型的な地方都市である。海や里山など今なお恵まれた自然を活かした場所、あるいは古民家や空店舗をアーティストに提供し、地元のお年寄りや美術に関心をもつ若者にも制作への参加を呼びかけ、40近い作品が10のエリアに誕生した。またキリコ祭りなど秋に開催される地元の祭りにも注目し、観客も体験できるイベントが多かったのも、この芸術祭の特徴であろう。この小論ではまず筆者が実際に目にし

た作品を中心に、下記に提示したように大きく4つのテーマに分け、要となる作品について検証していく。さらにトリエンナーレのスタートとなった2017年展の問題点、また3年ごとの開催が予定されている今後の課題について考察したいと思う<sup>5)</sup>。

- (1) 廃線となった「のと鉄道能登線」の駅舎や線路の利用
- (2) 使われなくなった古民家や小屋、空き店舗を異次元空間へと変化させる
- (3) 古来より続く人と海との関わり
- (4) 地元につながる祭りや生活様式をイベントとして披露

## 2. 作品の紹介と検証

### (1) 廃線となった「のと鉄道能登線」の駅舎や線路の利用

能登半島の先端にある珠洲市は長らく陸上交通の便には恵まれず、鉄道延伸の工事が始まったのは、戦後の1954年のことである。10年後には半島の中央にある穴水駅から蛸島駅まで開通し、70年代には奥能登ブームに乗り、鉄道も賑わった。しかし次第に乗客が減少して赤字路線となり、1987年の国鉄分割民営化の際に、経営が第3セクターの「のと鉄道能登線」に移行。この路線も2005年には廃止となったが、いくつかの駅舎や線路は今なお残されている。

能登線の終着駅だった旧蛸島駅には、使われなくなった券売機が現在も置かれ、往時の面影が色濃く残っている。インドネシア出身の美術家エコ・ヌグロホ(Eko Nugroho、1977年生)は旧駅舎の外壁や内部の板壁に、《Bookmark of dried flowers (ドライフラワーの葉)》と題する絵を描いた(図1)。木版画を連想させる黒くて太い輪郭線を用いて、人物や動植物が力強く表現されている。急激に人口が増加しているインドネシアでは鉄道敷設と延伸が急務の課題となっているが、日本は第二次世界大戦中から最近の高速鉄道計画にいたるまで、この国の鉄道事業に深く関わってきた<sup>6)</sup>。会場の旧駅舎内では、インドネシア国内の鉄道記録映画も上映され、両国の歴史的な関わりを垣間見ることができる。

旧駅舎を出ると、プラットフォームの先にここが終着地点であることを示す列車止めが見え、穴水方面へ延びる単線の線路が敷設されたままになっている。線路上を歩いていくと、やがて眼前にカラフルな屋外作品が現れる。世界各国の現代美術展で活躍するトビアス・レーベルガー(Tobias Rehberger、1966年ドイツ出身)がこの場に設置した《Something Else is Possible (何か他にできる)》(図2)である。カラフルな正方形を組み合わせたトンネル状の作品の内部には双眼鏡か取り付けられ、今歩いてきた線路を眺めることができる。この土地、あるいは我々の未来に「何か他にできることがあるのか」と考えさせられる作品である。

蛸島駅から3つめの飯田駅は、かつて急行の停車駅であった。現在も旧駅舎が残され、ここでは《小さな忘れもの美術館》と題する河口龍夫(1940年、兵庫県出身)のインスタレーションを見ることができる(図3)。帽子や傘、ハンドバッグや衣類など遺失物として駅に保管されてきたものが黄色く塗られ、壁面や棚に行儀良く並べられている。誰も取りに来ないまま長年残され、ついに忘れられてしまった物たちを通して、作家は「忘却」の意味を問いかける。

そして極めつけは、旧上戸駅に作られたインスタレーション《うつしみ》(図4)であろう。インド出身の男女3人組ラックス・メディア・コレクティブ(Raqs Media Collective)が旧上戸駅舎の形をなぞった構造物をフレームで作り、建物の上部にまるで浮遊するかのよう設置した。夜になると構造物全体が光り、幻想的な情景を演出する。これも過去の遺物を蘇らせ、今後のあり方を考えるきっかけを与える作品であろう。かつての「のと鉄道」の駅舎や線路を用いた一連の作品は、過去への郷愁を誘うだけではない、未来へ向けた課題を突きつけるものとなっている。

## (2) 使われなくなった古民家や小屋、空き店舗を異次元空間へと変化させる

能登半島は古くから漆の産地として知られ、七尾市の三引遺跡からは約6,000年前の漆塗り豎櫛が出土している<sup>7)</sup>。とくに輪島の漆工芸は江戸時代に加賀藩の奨励もあり、「輪島塗」として現在にいたるまで高い質と評価を誇ってきた。そうした漆工芸の作品を長年にわたって作り続けている作家が、田中信行(1959年、東京都出身)である。今回、田中は直地区・西中町の古い蔵を利用し、《触生-原初-》(図5)と題する漆と麻布を用いた乾漆の作品を展示した。薄暗い森に屹立する樹木とも見える作品について、作家は次のようにコメントしている。「古い蔵の静謐な空間に、あたかも地の神が舞い降りたかのように、乾漆による立体作品を存在させ、大地に根ざして連綿とつづく生命の根源的な力やリズムを表現した」(作品キャプションより)。

やはり直地区では海に近い本江寺の倉庫を利用して、角文平(1978年、福井県出身)が《シルエット・ファクトリー》(図6)と題するインスタレーションを展示した。巨大な倉庫の扉が海に向かって開かれ、鑑賞者は小屋の中央部に向かって延びた棧橋を歩くことになる。天井から吊されたアルミ製の切り絵は、珠洲の風景や祭りで使うキリコ、特産品の七輪、「あえのこと」<sup>8)</sup>で用いる道具などを表現したものだ。開口部から望む空と海が借景となり、鑑賞者は海から至近距離にいることを実感する。また小屋の外にも灯台や舟の切り絵が点在し、波音と潮風を肌で感じながら鑑賞する仕掛けになっている。

ところで直地区に隣接する飯田地区は、市役所や港がある珠洲市の中心地だが、町の商店街にはシャッターが降りたままの店が増えてきたという。明治期に建てられた旧八木邸はこの地域でも別格の大きさと風格を感じさせるが、空き家の状態が続いていた。芸術祭を機会に金沢美術工芸大学の教員と学生たちがチームを組み、珠洲に住む人たちと交流するワークショップを重ねながら、この地域を調査研究。古民家を舞台に3つの作品を制作し展示している。そのひとつ《奥能登曼荼羅》(図7)は敷地内の蔵を利用し、天井から板壁、床にかけて珠洲の風景や人々の暮らしを顔料で描いた作品である。キリコ祭りや農作業、漁の情景、この土地で目にする動植物、よく見ると能登半島の先端にある狼煙灯台(緑剛埼灯台)までが、遠近法をまったく無視した形でぎっしりと描き込まれ、鑑賞者に圧倒的な存在感で迫ってくる。参加した学生たちにとっても、青春時代の記憶に残る作品になるに違いない。

同じく飯田地区の小路でつながる歓楽街に、かつてJUENという名で賑わうスナックがあった。木彫を得意とする吉野央子(1964年、鹿児島県出身)は、空き店舗となった現在でも椅子やテーブルが置かれたままの店のホールや小部屋を利用し、木彫の魚を多数並べることで、まるで水族館や海中のような仮想空間を演出した(図8)。天井から吊り下げられたイワシやイカ、ブリ等の木彫は、かつて沿岸漁業の繁栄ぶりを象徴するものであり、ひと昔前まで営業していた店の賑わいを彷彿とさせる。

飯田地区からさらに内浦を進んだ上戸地区は、砂浜に並ぶ塩田で栄えた地域である。海に近い古い舟小屋を使って、眞壁陸二(1971年、石川県出身)は《青い舟小屋》(図9)というインスタレーションを展示した。小屋の内部の壁に青を基調にした細長い板が張られ、そこには能登の海や里山、草木、キリコ祭りの情景が描かれている。大きな礎が鎮座する床には砂が敷き詰められ、まるで枯山水のように毎日箒で掃き清めることで、波模様が形作られる。時間帯や天候によって屋内の光が変化し、この小屋は波音と光によって海を想像させる空間となっている。

## (3) 古来より続く人と海との関わり

能登半島は日本海側の北東方向へ突き出たように延びているので、長い海岸線を有し、ことのほか海との関わりが強い地域だ。北からリマン海流(寒流)、南からは対馬海流(暖流)が流れ込み、それが混じり合う場所に豊かな漁場が形成された。半島の東側は岩礁の海岸が続き、外浦と呼ばれてきたのに対し、西側の海岸は砂浜が多くて波も穏やかなので、内浦と呼ばれている。外浦は対馬海流の影響で山陰や朝鮮半島からの漂流物が多いが、日本海を挟んだ中国大陸との往来もあり、8~9世紀には福浦港(志賀町)



が渤海使を迎える玄関口となった。また珠洲では焼き物に適する土があったので、12世紀後半から15世紀末にかけて、珠洲焼という素朴な生活雑器が生産された。珠洲焼は日本海の航路を利用し、北海道南部から福井県にかけて広く流通したが、室町時代末に突如姿を消してしまったのである<sup>9)</sup>。

窯業が盛んな中国・景德鎮で陶磁器の制作を学んだリュウ・ジャンファ（1962年、中国出身）はこうした地理的・歴史的背景を踏まえ、観光地としても知られる見附島に近い海岸に、景德鎮の陶器と珠洲焼の破片を並べた《Drifting Landscape（漂流する風景）》と題するインスタレーションを展示した（図10）。見附島は唐に渡って仏教を学んだ空海が、佐渡からこの地へやってきた時に「見つけた島」という伝説が残っている。日本海を舞台に人と物、あるいは文化が盛んに往来した時代はすでに過去のものとなってしまったが、それを復活し、今日から未来へ繋げていくことは可能なのか、そんなメッセージが本作には込められている。

見附島があるのは砂浜が続き、波も穏やかな内浦だが、そこから北上して日置地区まで行くと、風景は一変する。外浦に突き出たシャク崎に向かって林の中を進んでいくと、突然目の前に海が現れ、断崖の途中に白いオブジェが見える。鴻池朋子（1960年、秋田県出身）の《陸にあがる》は、鹿のような大きな角と人間の脚を組み合わせた不思議な作品だ（図11）。鴻池は元々日本画を専攻したが、この世に生息するあらゆる物の根源的な力を絵画、彫刻、映像など様々なメディアと使って表現してきた。この白いオブジェも厳しい自然環境に抗うかのように、外浦の絶壁にへばりついている。

シャク崎に隣接する木浦海岸でも、2つの岩の間に奇妙なオブジェを見ることができる。地元でよく見かける小さな舟に巨大な西洋船の船首をつけたアローラ&カルサディージャ（Allora & Calzadilla）の《船首方位と航路》（図12）である。アメリカ出身のアローラとキューバ出身のカルサディージャは1995年以降、プエルトリコを拠点に活動する2人組のアーティストだ。船首に取り付けられた巨大な鳥の像は19世紀末に勃発した米西戦争の際、米国海軍の軍艦に用いられた船首をモデルにしているという。戦争の結果、プエルトリコはアメリカに割譲された。小さな舟と大きすぎる船首の組み合わせはバランスが取りづらく、作品は風を受けて常に動き続けている。そこに流動的な国際情勢の一面を垣間見せる、作家たちのメッセージを感じ取ることができるかもしれない。能登半島の海は日本海を囲む地域をつないできたが、それはまた世界の海とも繋がっているのである。

#### （4）地元で伝わる祭りや生活様式をイベントとして披露

ひびのこづえ（静岡県出身）は演劇やダンスの舞台衣装のデザイナーとして活躍中だが、今回は珠洲の海に潜り、その時の感動をもとに海の生き物をイメージしたカラフルな衣装を作り、旧飯塚保育所内に展示した（図13）。魚やクラゲなどの軟体動物、海藻を連想させる衣装が会場を浮遊し、訪れた者が実際に着用することができる衣装もある。また週末には森山開次、引間文佳といったダンサーたちが衣装をまわって踊るパフォーマンスが全9回実施され、延べ1,800人以上の観客を集めた<sup>10)</sup>。ひびのが毎月渋谷で行っている「ちいさな生きもの研究所」ワークショップが奥能登に場所を移し、新たな体験を人々に提供することになったのである。

また地元の人を巻き込んだワークショップ型の作品としては、キジマ真紀（1976年、東京都出身）の《海と山のズブらき》、鴻池朋子の《物語るテーブルランナー珠洲編》をあげることができるだろう。前者は珠洲の人々に海や山の思い出をテーマに旗を作ってもらい、旧日置小中学校の校庭に掲げた（図14）。一方、後者は鴻池が2014年から続けているプロジェクトの一貫として制作された。地元の人々の個人的な思い出を鴻池自身が聞き取って下絵を描き、それを語った本人がアップリケや刺繍の技を用いて、ランチョンマットに仕上げていく（図15）。家族やペットにまつわる思い出など物語の内容はさまざまであるが、作り手の思いがこもったマットの集合体は、作家自身が思いもしなかった方向性を示すこともあり、興味深い試みだ。



奥能登国際芸術祭では、地元の伝統行事を活かしたイベントも組まれていた。奥能登には「あえのこと」と呼ばれる祭礼が伝わっている。この地域の農家では、毎年12月4～5日頃に1年間の収穫への感謝と翌年の五穀豊穡を祈願する。家の主人が袴姿の正装で家の田んぼを訪れ、田の神を我が家に案内してもてなすのである。珠洲市宝立地区で今も営業を続ける銭湯「宝湯」は、かつて木造3階建ての温泉付き旅館だった。この2階の広間に当時の宴席が再現され、その一隅に「あえのこと」で田の神に捧げた膳が置かれ、行事を目に見える形で体験することができる(図16)。また広間の壁や床の間に展示された石川直樹(1977年、東京都出身)の写真が、その行事を理解する手助けとなるだろう(図17)。

芸術祭が開かれた9～10月にかけて珠洲市は秋祭りのシーズンであり、毎年、市内だけでも40を超える集落でほぼ毎日のように祭りが行われている<sup>11)</sup>。その多くは巨大なキリコ(切子灯籠)が繰り出す祭りで、高さ4～5mに及ぶ巨大なキリコを担いだ人々が神社を出発して集落内をくまなく歩き、五穀豊穡を願ってきた。山車の一種である曳山や蟻螂山が出る祭りもあるが(図18)、いずれにしろ、江戸時代から年中行事として伝わり、若者の数が減少した今日でも引き継がれている。祭りのハイライトはキリコが点灯される夜であり、日中はアート作品を鑑賞した客が夜のイベントとして楽しめる企画となった。

### 3. 問題点と今後の課題の考察

奥能登国際芸術祭が10月22日に終了してから約1ヵ月半後、2017年12月5日に第1回展の実施報告(概要)が発表された<sup>12)</sup>。それによると50日間の会期中、会場を訪れた人数(推計値)は71,260人、うち作品鑑賞者は68,665人、イベント入場者は2,595人であった。ちなみに2016年度に第3回展を実施した瀬戸内国際芸術祭は最近とくに海外で注目されているせいもあり、夏季の49日間だけでも40万人を超える人が訪れた<sup>13)</sup>。2つの芸術祭は知名度がまったく異なるし、瀬戸内は作品数206点、イベント数37と規模も大きいので、単純に比較するのは無理であり、また余り意味がないかもしれない。しかしながら奥能登芸術祭が今後もトリエンナーレとして継続し、息の長い地域復活への道を模索するのであるなら、やはり知名度をあげ、多くの人に人に訪れてもらうのが一番であろう。集客力アップの取り組みに有効な方法は何か、以下の3点から考察してみる。まず(1)会場の広域化、(2)マンパワーのアップ、そして(3)海外への発信である。

#### (1) 隣接する輪島市を含む、より広域の会場での開催

2015年3月、北陸新幹線が金沢まで開通したことにより、東京一金沢間は最短2時間半で行けるようになった。しかし金沢から珠洲までを直接結ぶ鉄道はなく、直通の特急バスを利用すると約3時間かかり、会場到着までかなりの長旅となる。それならば飛行機を利用すると、羽田から輪島市にある「のと里山空港」まで片道約1時間、空港から乗合タクシー、あるいはレンタカーを借りれば、1時間もしないうちに珠洲市に入ることができる。つまり「のと里山空港」を上手く利用すれば首都圏から2時間余で、到着することができるのだ。

観客動員力を高める一つの方法として、この「のと里山空港」を有する輪島市に参加を求め、国際芸術祭の会場の拡大を図るのはどうだろうか。輪島市は人口27,000人余(2017年10月現在)、伝統工芸として長い歴史をもつ「輪島塗」の産地として、外浦に面した豊かな漁場や千枚田、そして朝市や祭り(御陣乗太鼓)など観光資源にも恵まれた地域だ<sup>14)</sup>。奥能登国際芸術祭のキーワードとなる海、里山、伝統産業、祭りの要素を保有している点も見逃せない。確かに会場がより広範囲となり、移動手段の確保が先決だろうが、今回の芸術祭でも活躍した「すずバス」<sup>15)</sup>や「ふるさとタクシー」(乗合タクシー)といった現行のシステムを応用していけば、足の確保はある程度、図れるのではないだろうか。

(2) 芸術祭を手助けするボランティア、あるいは作品の制作者として多くの若者に参加してもらい、マンパワーを高めていく。

2017年秋の奥能登国際芸術祭を訪れて、いろいろな所で耳にしたのが「人が足りない」という言葉だった。前述の芸術祭実施報告によれば、作品の制作期・会期中・作品の撤去期すべてを含めて運営を手伝った人の数は延べ1,363人、これには登録なしに急遽かり出されたであろう地元の人も含まれている。報告書によれば、サポーターとして登録されている人数は429人(2017年11月現在、うち市内119人、市外319人)という。2016年に第3回展を実施した瀬戸内国際芸術祭では、約1,100人がサポーターとして実質的に活動した。2000年に始まった大地の芸術祭では「こへび隊」、瀬戸内では「こえび隊」というボランティア組織が実績を重ね、全国から集まった人たちが、さまざまな形で芸術祭に関わっている。2016年の瀬戸内国際芸術祭報告書によれば、第3回展では前回よりも海外からの参加が増え、台湾、上海、香港、シンガポール、アメリカ、フランスなど海外ボランティアが全体の約1割強だったという。「ウェブサイトで英語での参加申込みやメール対応を行ったことが功を奏した」と報告書は述べている<sup>16)</sup>。もとより人口減少に悩む珠洲市で行われる芸術祭には市外、あるいは海外からのサポーターの応援は不可欠であり、今後とも幅広く募集し、リピーターとして継続的に参加活動してくれるよう工夫していくことが肝心だろう。すでに日英二カ国語のサポーターWEBサイトは立ち上がっており、3年後の次回展までにどの程度の人数を集めることができるか今後注目していきたいと思う<sup>17)</sup>。また今回の金沢美術工芸大学の取り組みのように、美術を学んだり、関心をもつ若者に広く参加を求め、現地での制作を促す取り組みにも力を入れて欲しい。

(3) 自然や伝統行事、あるいは食材など日本の大都市にはない地方の魅力をより幅広い形で海外へ発信する。

3年後の第2回展開催をめざして、すでに複数の企画がスタートしている。2017年展の会場のひとつとなった「さいはての『キャバレー準備中』」では既存の建物を活用し、2018年1月から貸館としてスタートした。小さなステージを備え、海に面した立地条件を活かした場所になるかどうか、経営者の腕の見せ所だろう。次回展に出品するアーティストの募集も近いうちに始まる予定である。また同じく1月には東京・清澄白河で「さいはての今を届けナイト」を銘打って、サポーターの体験談や珠洲市への移住について案内するトークが企画された<sup>18)</sup>。奥能登国際芸術祭の基本情報を示すWEBサイトやサポーターサイトはすでにバイリンガルになっており、今後は中国語と韓国語が加わると思われる。このメインサイトには奥能登の食や行事を紹介する「おくのーと」があるが、これはまだバイリンガル化に向けて準備中の模様(2018年1月現在)。言葉の壁を越えて、世界中から観客やサポーターを集めることを目指しているのなら、バイリンガル化は急務であろう。

#### 4. エピローグ

2018年7月29日から9月17日の51日間にわたり、十日町市を中心とする越後妻有地区で「大地の芸術祭2018」が開催される予定で、テーマや参加アーティストも決まり準備が着々と進んでいる<sup>19)</sup>。2019年には瀬戸内で、そして2020年には珠洲市で奥能登国際芸術祭が開催予定されており、北川フラムを中心として始まった地方の国際芸術祭(トリエンナーレ)のトライアングルはほぼ完成しつつある。毎年、日本各地で雨後の竹の子のように登場する現代美術の祭典だが、これだけ数が増えると、自ずから自然淘汰されていく状況にきている。生き残りの決め手となるは、地域の魅力をどれだけ活かし、地元貢献できるかというオリジナリティー、そして観客を集め、芸術祭を運営していく人の力=マンパワーであろう。この二つの要素を兼ね備えたものだけが、今後も継続して行けると考える。

大地の芸術祭が始まった2000年からすでに18年、その運営に関しては幾多の経験を積み重ね、そのノ

ウハウが蓄積されつつある。「サイト・スペシフィック」というコンセプトで作られた作品は、半永久的な存在としてその土地に定着し、どこでも芸術作品を身近に見ることができる地域へと変化させている。インターネットやSNSを用いて世界へ発信していくことはもちろん重要なポイントであるが、地元に住む人々の理解と協力がなければ成立しないのも事実である。芸術祭の終了後には必ず地元民へのアンケートを実施し、その声を丁寧に聞き取って、次の機会へ反映させることも忘れてはならない。大地の芸術祭や瀬戸内国際芸術祭では、毎回、詳細な報告が公開されているが、奥能登国際芸術祭2017に関して、一日も早い詳細な報告書の発表を期待してやまない。

#### 【註】

- 1) 横浜トリエンナーレに関しては、<http://www.yokohamatriennale.jp/2017/> 参照。
- 2) 北川フラムが地方の芸術祭に寄せる基本的な考え方については、『ひらく美術：地域と人間のつながりを取り戻す』筑摩書房（ちくま新書）2015／同著『美術は地域をひらく：大地の芸術祭10の思想』現代企画室、2014を参照。なお北川フラムはこれまでの芸術祭をめぐる活動に対して、2017年度「朝日賞」を受賞した。
- 3) 越後妻有・大地の芸術祭については、<http://www.echigo-tsumari.jp/> および毎回発行されている公式ガイドブック参照。
- 4) 瀬戸内国際芸術祭については、<http://setouchi-artfest.jp/> および毎回発行の公式ガイドブック参照。
- 5) 本論で検討する作品や作家の基本的な情報は、『奥能登国際芸術祭2017』公式ガイドブック、現代企画室、2017および芸術祭の公式HP、<http://oku-noto.jp> に基づく。
- 6) 2015年インドネシアの高速鉄道システムについて日本と中国が売込みを競い、入札が行われたが、最終的に中国が落札した経緯がある。
- 7) 三引遺跡については、[http://www.ishikawa-maibun.or.jp/iseki\\_new/noto/mibiki/mibiki\\_kaiduka/mibiki\\_kaiduka.htm](http://www.ishikawa-maibun.or.jp/iseki_new/noto/mibiki/mibiki_kaiduka/mibiki_kaiduka.htm)
- 8) 「あえのこと」とは「あえ＝饗」の「こと＝祭り」を意味する。「奥能登のあえのこと」という名称で、1977年に重要無形民俗文化財に指定され、2009年には、ユネスコの世界無形遺産に登録された。
- 9) 珠洲焼の歴史については、蛸島地区にある珠洲焼資料館で知ることができる。
- 10) 芸術祭の実績は、後述する「奥能登国際芸術祭2017実施報告」を参照。
- 11) 芸術祭のHPおよびガイドブックには祭りのカレンダーが付記されている。ガイドブック pp.120-121 参照。
- 12) 奥能登国際芸術祭2017実施報告（概要）[http://oku-noto.jp/uploads/okunoto2017\\_jissihoukoku20171205.pdf](http://oku-noto.jp/uploads/okunoto2017_jissihoukoku20171205.pdf)
- 13) 瀬戸内国際芸術祭2016 総括報告書 [http://setouchi-artfest.jp/seto\\_system/fileclass/img.php?fid=news\\_topics\\_mst.20170905104016ad47dcd1f52bdd83921f71fa48d43460](http://setouchi-artfest.jp/seto_system/fileclass/img.php?fid=news_topics_mst.20170905104016ad47dcd1f52bdd83921f71fa48d43460)
- 14) 輪島市の基本情報は、<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%BC%AA%E5%B3%B6%E5%B8%82>
- 15) ガイド付のツアーバス。A～Dの4コース有り、1日2コースで2日間まわれば、ほぼ全ての作品を見ることができ、車のない観客にとっては有効な交通手段だった。
- 16) 瀬戸内国際芸術祭2016 総括報告書、同上のサイト、p.39.
- 17) 奥能登国際芸術祭サポーター WEB <https://sites.google.com/view/okunototriennale/>
- 18) 同じく、奥能登国際芸術祭サポーター WEB サイト <https://sites.google.com/view/okunototriennale/> 参照。
- 19) 大地の芸術祭2018については、<http://www.echigo-tsumari.jp/triennale2018/>



【図版リスト】 とくに明記のないものは、ミクスト・メディアによる作品

1. エコ・ヌグロホ《Bookmark of dried flowers (ドライフラワーの葉)》2017 旧蛸島駅
2. トビアス・レーベルガー《Something Else is Possible (何か他にできる)》2017 旧蛸島駅周辺
3. 河口龍夫《小さな忘れもの美術館》2017 旧飯田駅
4. ラックス・メディア・コレクティブ《うつしみ》2017 旧上戸駅
5. 田中信行《触生-原初-》2017 漆・麻布 直地区・西中町の蔵
6. 角文平《シルエット・ファクトリー》2017 アルミ板ほか 直地区・本江寺の倉庫
7. 金沢美術工芸大学アートプロジェクトチーム《奥能登曼荼羅》2017 飯田地区・古民家の蔵
8. 吉野央子《JUEN 光陰》2017 飯田地区・JUEN旧店舗
9. 眞壁陸二《青い舟小屋》2017 上戸地区・舟小屋
10. リュウ・ジャンファ《Drifting Landscape (漂流する風景)》2017 宝立地区・見附海岸
11. 鴻池朋子《陸にあがる》2017 日置地区・シャク崎
12. アローラ&カルサディージャ《船首方位と航路》2017 日置地区・木浦海岸
13. ひびのこづえ《スズカ》2017 正院地区・旧飯塚保育所
14. キジマ真紀《海と山のスズびらき》2017 日置ハウス(旧日置小中学校)
15. 鴻池朋子《物語るテーブルランナー珠洲編》2017 飯田地区・旧店舗
16. 「あえのこと」を再現したお供え 宝立地区・宝湯2階
17. 石川直樹《混浴宇宙宝湯》2017 同上
18. 上戸キリコ祭りの曳山

【図版】



図 1



図 2



図 3



図 4



図 5



図 6





图7



图8



图9



图10



图11



图12





図13



図14



図15



図16



図17



図18

図版に用いた写真はすべて筆者が撮影（2017年9月12 - 13日）